

# なごや 文化情報

2024

Summer

No. 410

NAGOYA  
Cultural  
Information

Pick Up Gallery／GALLERY IDF

随想／能楽師（ワキ方高安流）橋本宰さん

この人と…／特定非営利活動法人 日本室内楽アカデミー理事長・ピアニスト 佐々木惇利子さん

視点／「メニコンシアターAoi」と名古屋の小劇場 ～名古屋の民間小劇場、その現況と特色～

#zoom up／洋舞の振付家・指導者 松村一葉さん



2024

Summer

## 表紙

### 「間、青」

(2023年／H72.7cm×W60.6cm×D2cm／oil on canvas)

基底材という物質に絵具という物質を載せてゆく作業のなかで、規範からの逸脱を模索するとともに、偶然性を手繰り寄せる装置の発明を試みる。ストロークの岨道は、遠回りこそ小丘への近道といえるのかもしれない。描く呼吸。



ミト  
MITOS

2008年 名古屋造形芸術大学 美術学科 洋画コース 卒業  
2022年 「清須市はるひ絵画トリエンナーレ アーティストシリーズ Vol.97 MITOS展 -静寂のリズム-」  
清須市はるひ美術館(愛知)  
2022年 「Idemitsu Art Award 2022」国立新美術館(東京)  
2022年 「瀬戸現代美術展 2022」菱野団地各所(愛知)  
2023年 「歪曲」伊勢現代美術館(三重)

ウェブサイト <https://painter-mitos.studio.site>

## Contents

|                                                        |    |
|--------------------------------------------------------|----|
| Pick Up Gallery GALLERY IDF.....                       | 2  |
| 随想 能楽師(ワキ方高安流) 橋本幸さん.....                              | 3  |
| この人と... 特定非営利活動法人 日本室内楽アカデミー理事長<br>ピアニスト 佐々木伊利子さん..... | 4  |
| 視点 「メニコンシアターAoi」と名古屋の小劇場<br>〜名古屋の民間小劇場、その現況と特色〜.....   | 8  |
| #zoom up 洋舞の振付家・指導者 松村一葉さん.....                        | 10 |

### 「なごや文化情報」編集委員

杵屋六春(長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)  
桐山健一(舞踊・演劇ジャーナリスト)  
黒田杏子(ON READING)  
鈴木敏春(美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)  
濱津清仁(指揮者)  
望月勝美(編集者・ライター)

## Pick Up Gallery



酒井陽一展「wave」(2020年12月5日〜20日)

## GALLERY IDF (ギャラリー アイディエフ)

GALLERY IDF は、2002年にオープン。プライマリーのギャラリーとして、若手アーティストの発掘、マネジメント、展覧会の開催、国内外のアートフェアへの参加などを通して、取扱い作家の紹介に努めています。

「縁、絆」といったアーティストたちとのパーソナルなリレーションを大切に、日本人ならではの繊細さの中にあるパワフルな個性を持つ作家を取り扱っております。

この素晴らしいアーティストたちのポテンシャルに共感していただければと思っております。

設立 2002年 代表 竹松千華  
住所 〒465-0051 名古屋市名東区社が丘一丁目  
201番 IDFビル2階  
電話 052-702-1206

取り扱い作家 飯田キリコ、小野友美、酒井陽一、佐藤香菜、テラオハルミ  
生川和美、深川瑞恵、萬未来子 ほか  
ウェブサイト [www.gallery-idf.jp](http://www.gallery-idf.jp)

## 随想

## 人生を倍楽しむ「二足の草鞋」のススメ



能楽師（ワキ方高安流）

はし もと つかさ  
**橋本 宰**

1965年名古屋市中区大須生まれ。平成4年、当時宗家預かりであった西村欽也師に入門。その後、十四世宗家 高安勝久師、飯富雅介師に師事。主に飯富雅介師より高安流西村家の芸の指導を受ける。令和2年、重要無形文化財総合指定。令和5年度名古屋市芸術奨励賞受賞。

平成4年のある日、私は名古屋のとある総合病院の一室にいました。ベッドの上には当時宗家預かりの西村欽也先生、私の横には師匠の飯富雅介先生がおいででした。師匠が欽也先生に「こちらが今回入門希望の橋本君です」とおっしゃると、欽也先生はちらっと私を見た後、「そうか、そうか」と少し微笑んで師匠を見て頷かれました。まだ若かった私は緊張感に潰れそうになりながら「宜しくお願いします」とだけ言って頭をさげると欽也先生からは「頑張って」と小さな声で言っていただけました。その瞬間から私の「能楽師人生」が始まったのです。

入門のきっかけは信じられないかも知れませんが、車のラジオから聞こえてきた「能楽協会名古屋支部養成会員募集」に応募したことでした。担当していただいた大鼓方の笥鉦一先生は当初、私をシテ方に紹介したものの「専門じゃないとダメ」と断られ、行き場のない私に手を差し伸べてくれたのがワキ方の高安流だったのです。

実は能楽師になる前から私は「鍼灸師」という仕事もしていました。ですから俗に言う「二足の草鞋」を履くことになったのです。この言葉は昔からどちらかというとネガティブなニュアンスで使われていますね。要するに「中途半端」という意味合いが強く感じられる言葉です。私も今まで幾度となく「橋本さんの本業はどちらですか？」と質

問されました。その時私はいつも迷わずに「両方本業ですよ」と答えます。私にとっての「二足の草鞋」は「本業がふたつある」こと。どちらかが「副業」ではないのです。ですから私の中には「中途半端」という意味合いも気持ちもありません。確かに一部の周りの人にはそのように見えたかも知れませんが、大半の方々は私のことを寛容に受け入れてくれました。ただその分、周囲に迷惑をかけながらの二足の草鞋人生だったことは否定できません。

今振り返ると「能楽」がない人生が自分にとって想像できない程、「ワキ方能楽師」であることは私の誇りであり宝です。「ふたつの本業」を持つことによって多少の苦労はしたかもしれませんが、その代わり普通の人では経験の出来ない充実した時間を送ることが出来ました。

もし今、職業の選択で悩んでいる方がおみえなら、私は自信を持って「二足の草鞋」を勧めます。ただし、その両方の仕事が「大好き」ならば、ですよ。

# この人と...



特定非営利活動法人 日本室内楽アカデミー理事長・ピアニスト

## 佐々木 侑利子さん

### 人生は自然体で

1976年、栄えある第1回の名古屋市芸術奨励賞を受賞し、ピアニストとして世界中で活躍する傍ら、1985年に日本室内楽アカデミーを設立し、理事長として音楽活動を牽引し続ける佐々木侑利子さん。これまでNHKの中部地方放送番組審議委員を務め、さらに、名古屋国際音楽コンクール、名古屋演奏家育成塾を通じて後進の育成に尽力するなど、多岐に渡り精力的に活動する佐々木さんにお話を伺った。

(聞き手: 濱津清仁)

### 様々な習いごとを経験した幼少期～転機となった学生時代

「幼い頃、ピアニストになろうとは思っていませんでした。小学校に入学する前から、バレエを習っていて、ある時、父から『向いていない』と止められたことがありましたが、それ以外は習いごとに関しては自由にさせてもらいました。幼少期から母親の手ほどきを受けていたピアノをはじめ、油絵など様々な習いごとに取り組みました。油絵は、学生油絵コンクールに入選するほどの腕前でした(笑)」



3歳ごろの様子



小学生時代、学生油絵コンクールでの入賞作品

転機は、後に愛知県立芸術大学のピアノ主任を務められたピアニストの故・小津恒子さんが、中学2年生の佐々木さ

んの演奏を偶然に聴き、東京藝術大学附属高等学校が桐朋女子高等学校音楽科に進学するよう勧められたこと。「それまで音楽の道へ進むことは考えていませんでしたが、東京に行ってピアノを専門的に学ぶことも運命かとも思い、桐朋女子高等学校音楽科へ進学することにしました。進学後は1日10時間くらい練習するのが当たり前の環境で、生活がガラッと変わり、練習に明け暮れる生活でした。同級生は、ピアノの練習漬けで、学校行事にも参加したことのない人ばかりでした。実技レベルは高くてもテストの時はカンニングしていて、しかも悪びれる様子もないといった雰囲気にも馴染めなくて、高校2年生くらいの時には転校することも考えました。しかし、思いがけず実技試験の結果が良く、上位の成績だったので思いとどまり、そのまま桐朋学園大学に進学しました」

### ピアニストの基礎をつくったエピソード

佐々木さんのピアニスト人生の基礎となったエピソードを伺ったので、お話を交え紹介したい。1つ目は、西洋音楽を日本人が演奏して、ヨーロッパでも通用する演奏解釈の理論についてである。「日本人が、ドイツ人と同じようにベートーヴェンやシューマンの音楽を表現することはやはり難しいものです。そこで日本人としてどのように音楽を解釈していけばよいのかという具体的な理論をまとめたのが、いわゆるサイトウメソードです。それを桐朋学園高校では、故・小澤征

爾氏から演奏解釈の授業で、その後、同大学では齋藤秀雄先生から学びました。例えば、シューマンの作品はエスプレッシーボ（表情豊かに）と楽譜に書かれている箇所を叙情的、ロマンティックに演奏することが多いですが、日本人はとすると表現過多になり「演歌風」に演奏してしまいます。これを齋藤先生は『シューマン病』と呼んでいました。どのように音楽を表現したらよいか、理論的に学ばせていただきました」

2つ目に紹介するのは、高名なドイツ人ピアニスト ヴァルター・ギーゼキング氏（1895-1956）の日本人唯一の弟子、中山靖子氏に師事したことである。「中山先生のレッスンでは、もっと続けて弾きたいところを、4小節ぐらい弾くとすぐに止められてしまいます。フォルテ（強く）や速いパッセージなどの部分ではなく、特にラルゴ（ゆったり）、ピアノ（弱く）、ドルチェ（柔らかく）といった箇所で、和音の進み方、バスの響かせ方、どのようなタイミングで次の和音に進んだらよいか、フレーズの取り方、節回しなど、決して拍だけで音楽が進むことのない微妙な部分についてレッスンを受けたことが印象に残っています」

その後オーストリアのモーツァルトウム音楽院にて夏期講習を受講し、ザルツブルク音楽祭で演奏する機会に恵まれた。「当地で師事したピアニストで作曲家のヴィンフリート・ヴォルフ先生（1900-1982）からは『大指揮者のフルトヴェングラーは、シューマンはドイツ人にしか表現できない作曲家と言っているが、佐々木さんの演奏はドイツ人のようだ』と、特にシューマン作品の演奏を評価され、「ミス・シューマン」と呼んでもらいました。諸先生方の教える賜物だと思います」と佐々木さんは振り返られた。



ザルツブルク・モーツァルトウム音楽院ホールで演奏



初リサイタル  
(東京イノホール)

## 「来るものは拒まず」と精力的に活動

1975年、佐々木さんは第1回名古屋市芸術奨励賞を受賞。その後、地元名古屋の名古屋フィルハーモニー交響楽

団、セントラル愛知交響楽団との共演だけでなく、東京や大阪でもオーケストラと共演。演奏の機会は「来るものは拒まず」というモットーのもとで、さらに室内楽の活動も開始。NHK交響楽団のメンバーとも1978年頃から演奏を重ねていく。こうした室内楽での演奏経験が、1985年の日本室内楽アカデミー設立へとつながっていく。日本室内楽アカデミーは、名古屋を中心に、東京や大阪でも演奏会を開催しており、朝日新聞では「新幹線アカデミー」と評されるなど話題になった。当時、日本では発展途上であった室内楽の分野で、ハイレベルな演奏を目指しつつ、「後進の育成」「国際交流」「地域文化への貢献」を3つの柱として活動をしていくことになった。

1990年、日本とアメリカの相互理解を

あらゆる分野で促進するアメリカ政府国務省の招待プログラムに、佐々木さんは日本人音楽家として初めて招待され、作曲家との交流などをテーマにアメリカ各地を回った。そして著名な作曲家であるジョン・コリアーノ氏、アメリカの代表的な“ミニマル・ミュージックの巨匠”といわれるテリー・ライリー氏、世界的な弦楽四重奏団「クロノス・クアルテット」のメンバーなどと交流することになった。知り合った作曲家の曲を演奏するなど、その後の交流につながる機会となった。

「招待プログラムから帰国後、アメリカツアーの計画が持ち上がりました。そのきっかけとなったのは、偶然の出来事からです。選曲の段階でボストンの作曲家の作品も演奏しようと思ったことから、その作曲家の弟子の五木田岳彦さんから電話がかかってきました。偶然にも五木田さんがツアーのプロデュースを買って出たことでアメリカツアーが実現しました。ロサンゼルスではトヨタ自動車がスポンサーになってレクサ



日本室内楽アカデミー発足  
(サントリーホール)



ニューヨーク公演打ち上げにて  
作曲家コリアーノ氏と（カーネギーホール）

スホール、ニューヨークではカーネギーホール、ボストンではジョーダンホールで演奏する機会を得ました」

## 新たな可能性の模索

現代音楽の分野は、戦後アメリカを中心に、リズム、メロディ、ハーモニーを否定するところから始まり、ミニマル・ミュージックが盛んになった。ところが、佐々木さんが渡米した時に会った作曲家たちは、すでに異なる方向性を模索していた。アジアの音楽から素材を取り入れる等、音楽の流行が移りつつあったという。

そのような中、佐々木さんも音楽の方向性を探るという意図から、アジアに焦点をあてた活動に注力する。2000年には日本室内楽アカデミー設立15周年記念コンサートを「音楽が語るアジアの今」というタイトルで、5夜連続で行った。「アジアをイメージした作曲を募集しました。中国の琵琶や笛子、インドネシアのガムランなどを取り入れたものなど多彩な楽曲が披露されました。この時イギリス在住の作曲家ユミ・ハラ・コークウェルさんの楽曲も選び、ご本人に演奏していただきました。この出会いがご縁になって、2001年に開催されたロンドンでの日英文化交流事業『JAPAN2001』に私が招聘され、演奏することにつながりました」

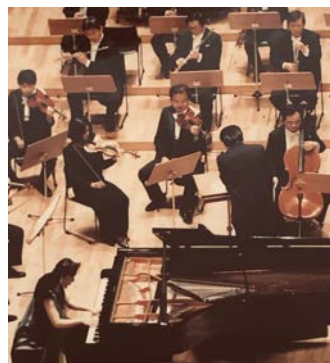


『JAPAN2001』日英文化交流事業  
コンサートの会場前にて  
日本室内楽アカデミーメンバー  
松美健太氏、小川剛一郎氏と

## 地域文化への貢献

一方で、名古屋を中心とした中部地方でも多岐にわたって活動している。電気文化会館ザ・コンサートホール、しらかわホール、愛知芸術文化センターのこけら落としコンサートでの演奏。NHK中部地方放送番組審議委員、東海テレビ・ラジオ番組審議委員などを歴任。CBCテレビ「美音市場」、「名曲ピアノサロン」でのピアノ演奏をはじめ、東海テレビ「仔利子の一奏一会～素敵にTalk～環境立国への交響曲」では、各企業の環境対策、環境ビジネスなどをテーマに、300名余の企業のトップと対談し、9年にわたり番組が継続した。番組内容をまとめて、日本経済新聞社出版センターより「環境立国への前奏曲」と題した本も出版され、現在、国会図書館に所蔵されている。テレビ愛知「未来への序曲 金言の庭」ではキャスターも務めた。その後、東海ラジオ「仔利子サンデーカフェ」のメインを9年3ヶ月務めた。

自身のピアノ演奏だけでなく、ファッション、時事問題、コロナの時期には「断捨離」など音楽にこだわらなかったため、リスナーがコンサートに来てくれるなど新しいつながりが生まれた。ほかにも「あいちトリエンナーレ」の企画公募に応募し、審査委員会の満票を得て当選した。日本室内楽アカデミー、世界劇場会議、アルパックの3団体から成る共同体が一年にわたってシンポジウム2回、ワークショップ、国内外の事例調査などを行った。佐々木さんの活躍は枚挙にいとまがない。列挙するだけでも誌面がいっぱいになってしまうだろう。



愛知芸術文化センター  
コンサートホールこけら落とし公演  
NHK交響楽団とピアノコンチェルト  
で競演



テレビ収録打ち合わせの様子  
左からジャズピアニストの故・前田憲男氏、佐々木さん、演出の生長康氏



「環境立国への前奏曲」での北京ロケ  
北京テレビにて環境対策を取材



「仔利子サンデーカフェ」  
収録風景

## 後進の育成

佐々木さんのライフワークといえる日本室内楽アカデミーは、支援の輪も広がり、着実に活動を続けている。1993年からは、若手演奏家のためのコンペティションを行っており、海外からのエントリーもあったことなどから、2002年から2008年にかけては、名古屋国際音楽コンクールを計4回開催した。

2004年には日本室内楽アカデミーが特定非営利活動法

人に認定されたことから、名古屋市の文化振興に携わる担当者たちと「何か地域の文化振興に関わる活動を一緒にできないか」と会議を重ねた結果、若手演奏家を育てるプロジェクト

として名古屋演奏家育成塾（以下「育成塾」）を発足させ、2024年に20年目を迎える。年に2回開催される育成塾は、年々レベルが上がってきていると佐々木さんは喜ぶ。



第4回名古屋国際音楽コンクールチラシ



名古屋演奏家育成塾 第30回ベストソリスト賞受賞者レセプション  
(名古屋市公館)

「大学卒業後、名古屋に戻りましたが、東京で音楽を学んだ中部地区の若手演奏家グループの会に参加しました。例会で演奏をすると『いびりの会』と覚えてしまうほど厳しい批評を受けました。昨今の風潮である褒めて育てるといふのは真逆でしたが、具体的にアドバイスを受けたことは良い経験になりました。育成塾でも、大学でのレッスンでは得られないような、若い演奏家が批評される場を設けたいと考えました。育成塾コンサート本番の1か月前には、〈フィニッシング（仕上げ）レッスン〉というものがあり、演奏家としてどうあるべきか、上手下手ではない“感動”を与える演奏とは何か、といったことをアドバイザーの先生方が具体的にアドバイスしています。かなり厳しい指摘もあります。しかし、それを指摘されたエントリー者はコンサートまでの1か月間、必死に試行錯誤します。褒めてしまえばそこで満足して終わってしまいますが、厳しく批評された演奏家はその後、見違えるように成長し、本番では見事な演奏を披露してくれます」

佐々木さんは、「昨今、上手に演奏する演奏家は多いが“感動”を与えることができない」と危惧している。筆者が「どうしてでしょう」と問いかけると、「なぜだと思いますか」と逆に問い返されてしまった。筆者は「演奏の動画等が日常に氾濫しているため、それを聴いた演奏家が同じような演



名古屋演奏家育成塾アドバイスタイムの様子  
先生方からアドバイスをいただく参加者

奏をしてしまうのではないかと。著名な人が演奏したものを模倣して画一的になってしまっているように思う」と答えると、佐々木さんはうなずいた。

「育成塾には聴衆が選出する〈聴衆賞〉があります。賞を設けることで、聴き手がさらに積極的になり、演奏家のファンとなって、演奏を聴きに行きリピーターになってくれます。聴衆が増え、さらに互いに誘い合って演奏会に足を運ぶようになる波及効果が生まれているのが嬉しいですね」

また、佐々木さんは育成塾で副委員長を務める（株）メニコン代表執行役会長 CEOの田中英成氏とのご縁から、2018年に田中氏が発足させた若手演奏家の支援組織（公社）スター・クラシックス協会の理事も務めている。これまで200人を超える育成塾の参加者から、ピアノの古田友哉さん、伊藤香紀さん、井上莉那さん、ハーブの天野世理さん、チェロの下島万乃さん、マリンバの前川礼奈さんたちが、さらにスター・クラシックス協会支援プログラムに参加するなど、佐々木さんが撒いた種が花開き、さらなる広がりを見せている。

「今後もチャンスを見逃さず活動を続けていきたいと思っています。今なお、現役で演奏することができて幸せです。音楽の世界に引退はありません。指が動く限り演奏活動は続けたいですね。気候変動、地震、政治など、世の中は目まぐるしく変化しますが、翻弄されるような生き方ではなく、まさに“人生はアンダンテ”、自然体で生きていきたいと思っています」そう穏やかに語る佐々木さんの姿は、まだまだ情熱と好奇心に満ちていた。



佐々木利子&N響メンバーシリーズ  
「夜会コンサート〜魅惑のアンダンテ〜」  
カーテンコール

#### 参考文献

「人生はアンダンテ」中経マイウェイ新書、「ショパン」（2020年11月号）ハンナ、「一奏一会-環境立国への前奏曲-」日経事業出版センター

# 「メニコン シアターAoi」と 名古屋の小劇場

## ～名古屋の民間小劇場、その現況と特色～

2023年7月、千種駅からほど近い名古屋市中心部に、演劇・音楽・舞踊公演などを上演する総合芸術劇場としてグランドオープンした「メニコン シアターAoi」。公益財団法人メニコン芸術文化記念財団が、隣接する「HITOMIホール」（2012年開館）に続いて設立したこの劇場は、新たな文化芸術発信拠点として大きな期待を集めている。また、同じく名古屋の民間劇場として近年、高い稼働率で私たち観客に多彩な舞台芸術を届けてくれる小劇場にも注目。独自の視点や運営方針により小劇場演劇シーンを支え、活性化に貢献する名古屋の民間小劇場をご紹介します。

（まとめ：望月勝美）

### パンデミックの最中に届いた 新劇場誕生のニュース

舞台芸術の世界にも大きな打撃を与えた新型コロナウイルスの感染拡大から約3年——「メニコン シアターAoi」開館の報が届けられたのは、2022年末のことだった。

おりしも第8波到来中のまだまだ不安な状況下でありながらも、〈名古屋に新たな劇場が誕生する〉という明るいニュースに胸躍った。

（株）メニコンの代表執行役会長 CEOの田中英成氏は、2021年に一般財団法人メニコン芸術文化記念財団を設立。2023年に公益財団法人の認定を受け、現在に至るまでその



JR・地下鉄の千種駅より徒歩4分の好立地に建ち、メニコン株式会社の本社オフィスと劇場から成る「メニコン シアターAoiビル」



ビルの1階から6階部分に位置する「メニコン シアターAoi」  
舞台中央には、6.67m×2.73mの大奈落の設備も

代表理事も務められている。2023年4月には、地上9階、地下1階建ての新社屋をオープン。その1階～6階部分に、301の客席とオーケストラピット、最新の音響・照明・舞台機構を備えた「メニコン シアターAoi」が誕生した。

初代芸術監督には劇作家・演出家の山口茜さんが就任し、以降、山口さんのグランドデザインに沿った多彩なプログラムによる主催公演と貸館事業を行っている。



1階エントランスホールの一隅には、気軽に立ち寄ることができるカフェ「miru-on cafe」も併設

### 開館から1年を振り返って 見えてきた2年目以降の課題

2023年7月にグランドオープンを迎えた劇場では、こけら落としの歌劇『あしたの瞳』（メニコン創業者の田中恭一名誉会長の半生をモチーフにした歌劇）を皮切りに、初年度の主催公演として演劇や音楽、人形劇、人材育成プログラムなど15公演を実施。山口さんが主宰するトリコ・Aや、劇団チョコレートケーキの新作、作家・演出家・俳優の岩井秀人さんが構成・演出・脚色を手掛けた参加者公募作品、子どもも大人も一緒に楽しめる座・高円寺レパートリー、人形劇ユニットと演出家の天野天街さんがタッグを組んだITOプロジェクトの糸あやつり人形芝居ほか、東西の良質な創り手による作品や、当地ゆかりのアーティストが関わる作品など、バラエティに富んだ魅力的なラインナップを展開した。

そして現在、開館から1年を迎え、同劇場では既に2024年度の主催事業ラインナップもスタートしているが、初年度を経て山口さんは、「劇場に人を集めることの難しさを痛感し、考えさせられる1年」だったという。1年目の成果を検証する前に2年目のラインナップを決めなくてはしなかったため、今年度での大きな変化はないそうだが、「“芸術を日常の中に取り入れていく仕組み”みたいなものを作るための入口があるんだな、ということを実感しました。今後も観客と向き合ったり、交わ

り合ったりすることを強く意識しているアーティストを呼んでいこう、と改めて思いました」と、山口さん。

## 民間劇場ならではの独自性を発揮し より多くの人が訪れやすい開かれた場へ

現在は京都在住で2児の母でもある山口さんは、子育てを通して地域の人々や個人商店などと交流する機会を得たことで、地域の方に助けられ、生かされていることを実感したという。そうした日常の出来事が芸術監督としての考えにも反映され、劇場周辺の地域の人々との繋がりについて、この1年で一層意識するようになり、今は近隣の方々が生活圏内に劇場があることをどのように捉えているのか、とても興味があるのだとか。

また、自身も幼少期から生きづらさを抱え、葛藤してきた経験から、山口さんは就任当初より“社会的弱者やマイノリティにも寄り添う劇場づくり”を目指し続けている。「子どもたちや、子育て中の保護者の方、外国籍の方、障がいのある方、高齢者など、そういう方たちが日頃我慢しているようなことが少しでも減るように劇場があるといいな、と思います」と語り、「劇場に足を運ぶ習慣を持てる人というのは、家庭が安定していたり、金銭的にある程度余裕のある方だったりすると思いますが、そうではない方たちにはどうしたら劇場に来てもらえるか、ということも考えていきたい」とも。

そんな山口さんの右腕となって、共に主催事業のラインナップを考案したり、芸術監督の考えを具現化するサポートとともに、劇場業務全般を担う副館長の樋口寿弥さんも、人と人との繋がりを重視し、観客と劇場スタッフが相互に顔の見える運営を目指しているという。

「この劇場が何を届けたいのか、どういうお客様に来ていただきたいのか、どういうものを見せたいのか、ということをまだまだ考えていく段階ですので、京都にいらっしゃる山口さんと連携しつつ、名古屋にいる私たち劇場スタッフに何が出来るのか、ということ日々考えています。山口さんが思い描いていらっしゃることを現場としてどのように現実の運営に落とし込んでいくかということは、やはりコツコツと観劇人口を増やしていくことに尽きるのかなと。そのためにも近隣の方々にも気軽に立ち寄っていただけるよう、私が劇場の窓口になればいいな、と考えています」

他にも、地元アーティストとの連携作品の創作や、単に作品を鑑賞する場に留まらない、観客同士の交流の場としての機能を備える構想などもあるようで、3年目、5年目、10年目と進化していく未来も追い続けていきたい劇場だ。



左から副館長の樋口寿弥さん  
芸術監督の山口茜さん

## 実は同一オーナー所有による 個性豊かな5つの表現活動の場

一方、名古屋には近年、よりコンパクトな規模感の空間として利用の多い民間劇場が幾つか存在している。中でも、中区

伏見の「G/pit」、西区那古野の「円頓寺 Les Piliers」、中村区亀島の「ナンジャレ」の3館は、当地のさまざまな劇団やプロデュース団体などによって数多くの公演が催され、個人的にも観客として足を運ぶ機会の多い小劇場だ。

実はこの3館とも、中区伏見の中京ビル1階にある文具店・中京堂がオーナーの劇場である。ほかに、主にダンス公演やワークショップなどが行われる中村区長戸井町の「黄金4422BLDG.」、さらに中京堂の向かいに建つ「総合劇集団俳優館」のビルも所有しているそう。

といっても、このうち中京堂のご主人が劇場づくりに関わったのは同ビル内の1階部分に設けた「G/pit」のみで、ここを劇場として整備することになった経緯も、たまたま演劇関係者に空きスペースを貸したことによる思わぬ展開だったため、参考にするために、東京の小劇場を幾つも巡って見学を重ねたそうだ。

## 収支は二の次!?

### “劇団を守り、支える”を旗印に運営

そうしたオーナーの愛ある支援のもと、2004年12月末にオープンした「G/pit」の立ち上げから関わり、現在も代表として劇場運営を担う俳優の松井真人さんは、「中京堂さんには場所を貸していただいているというより、いろいろな面でいつも助けていただいている、という感じです。ここが出来た当時はまだ名古屋に演劇の賞も少なかったので、民間で賞を出す演劇祭を企画できるような劇場を作ろう、と考えてスタートしました」と。

その目標どおり、【チャレンジフェスティバル】や【名古屋演劇杯】といった企画を数年に渡って実施し、松井さん自身も若手劇団や学生劇団をバックアップしてきた。残念ながら現在は一時中断しているが、「劇団を応援していきたい」というスタンスの劇場であることに変わりはなく、そうした創り手側に寄り添う運営方針が利用率の高さに反映されているのだろう。

また、中京堂が「G/pit」のほか4館を所有するに至った経緯は、「劇場や表現活動を行える物件を敢えて選んでいったというよりは、偶然の要素の方が強かった」とのことだが、既に劇場として機能していた空間を買い受けたり、店子である劇場主に物件の利用法を一任するなど、演劇活動に理解を示すオーナーはとても貴重な存在だ。所有する各館それぞれの活動を尊重し、応援する姿勢が、自由な創造の現場を守り、ひいては観客にとっても個性豊かな空間や多様な舞台芸術を享受できることに繋がっているのではないだろうか。

今回、詳細に触れられなかった上記4館のほかにも、名古屋にはまだまだ魅力的な民間小劇場があるので、機会があればいつかまたご紹介したい。



演目により舞台や客席を自在に配置可能で  
最大50名まで収容できる「G/pit」



劇団あおきりみかん所属の俳優として各所で活躍する傍ら「G/pit」の代表を務める  
松井真人さん

# #zoom up

ズーム・アップ

洋舞の振付家・指導者

まつ むら かず は

## 松村一葉さん

「風通しの良い振付作品」を  
目指して

コロナ禍からの復活に力を注ぐ名古屋の洋舞界。旗振り役として期待されている中堅の一人が、川口節子バレエ団を拠点に活躍する気鋭の振付家で指導者の松村一葉さんです。アメリカ留学時代の恩師の教え「舞踊は時間と空間の両方を司る芸術である」を深く心に刻み込んで創作に奮闘し、観客の記憶に残る舞台公演を目指して厳しい指導に精励する松村さんに、情熱の源や今後の夢を語っていただきました。

(聞き手: 桐山健一)



### アメリカ留学で創作の基本と魅力を実体験

自宅の1階が母（川口節子さん）のバレエスタジオで、物心つく前から見よう見まねで踊っていたそうです。児童舞踊コンクールでの友達と一緒にバス旅行など、楽しい思い出の多い子ども時代でしたね。大好きな舞踊の知識を深め、可能性を広げたい、と考えて16歳の時にアメリカに留学。サンフランシスコ・シティ・お母さんと踊る幼少期の松村さんバレエ・スクールで4年間、ニューヨーク州立大学舞踊科でバレエ、モダンダンス、創作技術を中心に舞台芸術全般を4年間学び、数々の作品を踊りました。卒業公演作品『Pieces of Enchantment』では選曲・振付を手掛け、「遊び心が満載。洒落たステップも魅力」と評されました。創作活動の原点とも言える作品で、何度も作り直した当時のことが鮮明に蘇ってきます。

留学の最大の収穫は、振付の基本的な精神から実技まで徹底して学んだことです。基本中の基本は「空間構成にお



いて風を通すことの大切さ」。つまり「平面的」な印象に陥らず、「左右対称」も多用せず、見た目にも「息が詰まらず」、常識や決まり事を壊して「予定調和にならない」ことが重要で、「風通しが良くて奥行きを感じさせる空間を創出するムーブメント」こそが舞台という3D空間で映える事実を何度も実体験しました。



アメリカ留学中の仲間たちと

### ダンサーの資質と心に響く音楽が触発

アメリカで1年間の指導者経験もして24歳で帰国。創作と指導を2本柱にした舞踊人生の第2章が始まりました。創作の基本はダンサーファースト。資質を見極めて刺激を受けることから始まり、心に響く音楽が流れてくると自然と体が動き出し、ダンサーと音楽に触発されて次第に「作品」という形になっていきます。風通しの良さに加え、型にとられない独創性や切れ味の鋭さも大事にしています。

これまでに約50の作品を手掛け、評判も良くて私も気に入っている作品には、脱力した動きをユーモラスに見せる『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』、16名のダンサーが予測できない動きの中で一瞬も静止することなく10数分間も踊り続ける『Vitamins』、閉店後のバーでカクテルたちとパーテナーが多彩なダンスを繰り広げるスピーディーでカラフルな『Cocktails』、憧れの振付家ジョージ・バラシン風の粋で華やかな『アメリカン・ファンファーレ』……。今年1月の名古屋洋舞家協議会主催公演『Dance freedom' 24』で上演した『エレメント～風火水土～』は自然のエネルギーを視覚化した小品で、「モダンな感性と機知に富む構成には目を見張るものがある」と、身に余る評価をいただきました。



『Cocktails』

名古屋市文化振興事業団企画公演の『白馬亭にて』（2017年）と『伯爵令嬢マリツァ』（2022年）のオペレッタ2作品の振付に選ばれたのも貴重な経験でした。他ジャンルのクリエイターとの新たな出会いは刺激的で収穫も多いから、何とも楽しいですね。演出家や指揮者の要望にも結構柔軟な対応ができると自負しているので、今後も機会があれば様々な分野とのコラボレーションに参加したいし、委嘱作品の中にも「自分の色」を出せれば喜びも倍増です。



『伯爵令嬢マリツァ』のカーテンコールで

## 厳しい指導で「頭の良いダンサー」を育成

次世代を担う若い才能の指導・育成では、型と振りを徹底的に覚え、応用力を付けることで練習課題を完全に達成する喜びを学んでほしい、と思っています。どんなに素晴らしい才能や技術があっても振りや注意を覚えられないとプロにはなれないので、バレエ脳を鍛えて「頭の良いダンサー」を育てたいですね。バレエ団では小学5年生から大人まで指導していますが、子どもたちの人生を担う責任を持つ覚悟で厳しい指導を続けているため、私のクラスには途中から来なくなってしまう子も少なくありません。「ダンサーの表情が生き生きしている」とか、「コール・ド・バレエがしっかりしているのは日ごろの厳しい指導力のたまもの」とか評していただくことがあります、最高の誉め言葉ですね。

## 芸術創造賞受賞で貢献の必要性も自覚

名古屋市芸術創造センターのバレエアカデミーでも講師を務めました。2017年の修了公演『SHOW CASE』では明かりをテーマにした群舞の『The Light』をフィリップ・グラスのミニマル・ミュージックで創作しましたが、前衛的なコンテンポラリー作品にもかかわらず受講生46名中30名もが出演したいと言ってくれたのは予想外の喜びでした。

喜びと言えば、2022年に名古屋市文化振興事業団の第38回芸術創造賞を受賞したことも



芸術創造賞受賞を記念してご家族と

そうですね。ダンサーとしては芽が出ず、出産を機にリタイアしましたが、振付家として評価されたのには胸が熱くなりました。この授賞は「当地舞踊界に貢献するように」との叱咤激励でもあると思いますので、求められれば振付作品の提供も積極的に引き受けたいですね。幾何学が好きな私は理系脳だと思っていますが、今後は様々な舞台芸術を鑑賞することで文系脳も養い、メッセージ性やストーリー性の強い作品にも取り組むことが目標です。「日本的な情緒も増せば、一段と魅力的な作品になる」とのアドバイスもいただいています。

## 使命は上質な作品上演、課題は集客増

川口節子バレエ団の2本柱「古典バレエの全幕上演」と「独自の創作作品の上演」の充実に力を注ぎ、テクニックも表現力も向上させて「また見たい」と思ってもらえるような質の良い作品の上演が最大の使命ですが、集客も大きな課題ですね。観客が多ければ多いほどモチベーションも上がるし、多くの拍手がダンサーたちを育ててくれる。出演ダンサーのチケット販売ノルマも減る。いいことづくめだから、公演のたびに満席にするのが夢で、SNSでレッスン風景を発信するなど広報活動にも力を入れています。「プロになれないなら辞めるしかない」という常識が根強い日本のバレエ文化が変わって、末長く舞踊に関わり続けられる環境が作られれば、これほど嬉しいことはありません。



川口節子バレエ団

## 2025年1月、惑星がテーマの新作を上演

10歳、6歳、4歳の3人の子どもの育児にも時間を取られて大変ですが、好きな道を歩んでいるので少しも苦になりません。2025年1月の川口節子バレエ団の定期公演『舞浪漫』ではトリを飾る30分の新作を上演する予定で、挑戦するテーマは「惑星」。壮大な世界観をトゥシューズで踊るエンターテインメント性豊かなコンテンポラリーバレエです。観客の皆さんの人生を明るくする作品になるよう、日々試行錯誤を続けています。

## なごや文化は寄附でもつ



名古屋文化基金

## 支援・育成事業

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —



## 参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



## 鑑賞事業

— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —



## 市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋文化基金の詳細および  
寄附のお申込みはこちらご寄附に関する  
お問い合わせ名古屋観光文化交流局  
文化芸術推進課  
TEL 052-972-3172公益財団法人  
名古屋文化振興事業団  
TEL 052-249-9390

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>WE MAKE YOU MOVE  
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

A&V  
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK舞台音響／映像設備  
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

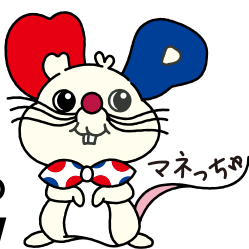
この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する  
株式会社 エアンドブイ  
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98  
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

## 業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO  
株式会社 マネージメント・プロ

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

〒461-0004 名古屋市中区葵2-11-22 アバンテッジビル301

TEL:(052)508-5095

FAX:(052)508-5097

Web: [www.mane-pro.com](http://www.mane-pro.com)E-mail: [mane-pro@mane-pro.com](mailto:mane-pro@mane-pro.com)